年間選者賞（平成二十六年七月号～二十七年六月号）

斎藤佐知子選

佐佐木定綱

（平成二十七年五月号）

五時二分この一日に流された血汐よ西の空にて光れ
ぼくたちは舞台の場面が変わるとき落ちたメガネの行方を捜す
眠き目でフルーツビールを飲みながら熟していきし君のほっぺた
バックリと口を開けたる親指の奥から聞こえる「現実」の声
傷つきし君の指から垂れる血のようなブラッドオレンジジュース
網上の豚の破片に血が滲みまたひとつ喰う　知らなかった「死」
血の垂れる肉片を見て「グロいな」と言いながら焼くリアルのグロさ
焼肉の煙の海に入るため黒きネクタイ脱ぐ男あり

●選者の言葉

佐佐木定綱作は、一読して血腥い印象の連作である。具体的な記述はないが、第一首目の初句「五時二分」により、今年の二月一日、「イスラム国」のテロリストによって、日本人ジャーナリスト後藤健二氏が殺害された事件に取材した連作であることがわかるようになっている。日本時間午前五時二分、殺害の様子がネット上の映像として世界に流されたことがさらに深い残虐性をもって衝撃を与えた事件であった。事件から受けた衝撃を、言葉によって、伝聞として、他者の物語として語ることは簡単である。しかしそれでは真実の感動は伝えられないだろう。その難しい問題を乗り越える一つの方法としての挑戦と思い、若い創造力と想像力を受賞の理由とした。

●作者の言葉

竹山広さんの作品の影響を感じた。死者と生者に絶対的な断絶がある。死者の絶望をつよく感受し、抱え込みたいという作者の意識が立ちあがってくるのだ。歌集を読む会によって、変動する自分の読みもあるのだ、と気づいた。